

南砺市文化芸術振興実施計画第1回策定委員会 議事録

日 時：令和2年7月2日（木）16時30分～17時30分

会 場：南砺市役所 福光庁舎別館3階大ホール

出席者：古池委員長、松本副委員長、安嶋委員、川合委員、杉本委員（水落委員代理）、
舟岡委員、片岸委員、高坂委員、野村委員、村上委員、此尾委員、向井委員、
前川委員、川田委員
田中市長、事務局

1. 開会

2. 委嘱状の交付

3. 市長あいさつ

今年は、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、我々は経験したことのない3、4か月を過ごしている。昨年の計画によつての事業、もしくは南砺市の文化芸術イベントの取り組みというのは、歴史に残るほど様々な行事が行われた。演劇の聖地である利賀での「シアター・オリムピックス」、4年に1度の木彫刻の世界的な祭典「いなみ国際木彫刻キャンプ」、(この計画の)ワーキンググループで練っていただいた獅子舞共演会など、大成功に終わった。最近では、特に子供たちに文化芸術に親しんでもらおうと、色々な企画も進めてきた。このような様々な計画が他の事業ともリンクして広まってきている。改めてご尽力いただいた方々には、感謝申し上げます。今年の2月のスキー国体ではまったく雪がないということで、開催が危ぶまれていたが、直前に雪が降り、なんとか大成功に終わることが出来た。芸術と文化、スポーツというのは、我々が忘れそうになったものをもう一度呼び起こしてくれる、そして暮らしの原動力になるようなものだと感じる。しかしその次の週あたりからコロナの感染が拡大し始め毎日の話題となり、非常事態宣言、小中学校の休校など、慌ただしい新年度を迎えた。ここにきて収束しつつあるものの、東京では第2波が来ているのではという状況もある。もう一度気を引き締めていかなければならない。文化芸術というものが、地域に関わる皆さんが色々な思いをもって取り組んでいることが、地域の力になっていくのだと思う。特に獅子舞や民謡など、昔から何百年も続く歴史的なお祭りを皆さんが大切に、そしてそのお祭りを盛り上げるために、職人の皆さんが一年をかけて取り組んでいる。今年はコロナによって、城端曳山祭、井波よいやさ祭り、福野夜高祭、五箇山の獅子舞、福光の春季例大祭、すべてが中止となってしまった。こういう時だからこそ、芸術や文化、スポーツも含めて、そういうものが大切なのだということを認識して、大変な時期だがみんなで連携してどうつないでいくかということを考えていかなければならない。

4. 委員の紹介

5. 委員長及び副委員長の選出

(古池委員長、松本副委員長の選出)

委員長：平成 27 年の基本計画策定時、最初に南砺市に来てとても驚いたのが、この地域の芸術文化の“厚み”である。大きく分けて二つの文化、すなわち“創造的な芸術文化”と“規範的な（土徳の）芸術文化”が、どこかで関連しながらつながっているのではないかとということで、当時議論をしたものである。その時に、“結”という言葉が象徴的に表れているのが南砺市の特徴だと感じた。この“結”が今、重大な局面を迎えている。一つは、創造的な文化の表現が様々な制約を受けているということで、差し迫った問題で何か考えていかななくてはならない。もう一つ、もっと心配していることが、この土地で長い年月をかけて育まれてきた土徳、暮らしの精神風土のこと。本来であれば「関わること」を続けて今日まで来て、これからもつながっていくはずのものが、関われなくなると難しいテーマである。まさにこの二つのことを、これから策定委員会やワーキンググループの皆さんとどのように考えていけばよいのか、非常に重いテーマである。ただこれは、日本全国で模索しているテーマであると思う。ここでの議論はもちろん南砺市の議論であるが、ここで何か実践が生まれれば、全国同じように困っているところに対しての示唆を投げかけられるのではないかと考えている。ぜひ皆さんのお知恵をお借りしたいと思う。

副委員長：昨年の獅子舞共演会は大変感動した。なぜああいうことが出来たのかと考えてみると、ワーキンググループがうまく機能しているから。自分は色々な審議会に所属して議論しているが、ワーキンググループがしっかりと機能したという事例は、この委員会が唯一初めてかもしれない。（今回も）若くて様々な立場でご活躍の皆さんに参加していただいているこの委員会に対して期待しているところである。また皆さんと一緒に良い計画となるよう頑張っていきたい。

6. 議事

（資料 1、2 について、事務局より説明）

委員長：今回も、ワーキンググループにて実質的に作業していただくような体制になっている。しっかり議論していただき、ありがたい。資料 2 のとおり、各部会にて熱心に議論していただき、その結果をこの策定委員会にあげていただき議論するというような形である。

（資料 3、4 について、事務局より説明）

委員長：資料 3 の新たに追加を検討している項目について、色々な分野・視点で記載されているが、「新しい生活様式」というのが本命かもしれない。

委員：基本計画の加除修正というのは、事務局にて随時見直しが必要な部分について行うようだが、実施計画の内容とのすり合わせも必要だと思う。基本計画の加除修正はどのタイミングで行う予定なのか。

事務局：基本計画について、資料 3 にて大まかな修正概要については説明させていただいたが、現在このような内容で修正を加えている最中。さらにワーキンググループ

で実施計画について検討いただいた内容も反映させながら加除修正を行い、次回の策定委員会までには朱書きで修正を加えた基本計画（案）を事前にお送りし、第2回策定委員会にて細かいところをご指摘いただければと考えている。

委員長：実施計画の内容を練っていきながら、それも踏まえて次の策定委員会時に、基本計画に加除修正したものを議論いただく。そういうことであるので、資料3に想定されている改定項目がいくつかあげられているが、他に書き落としている項目がないか、これで大丈夫か等、今ご意見をいただきたいところである。

委員：これらを盛り込んだ上で、ワーキンググループで議論を行い、実施計画に反映させていくということか。現時点では、この他に特に入れてほしい項目は思い浮かばない。

委員：新しい生活様式を考慮すると言っても、具体的なものはまだない。お祭りでも集まりでも様々な場面で、実体が見えてくれば良いのだが。アーカイブズホームページについては、ビジュアルで（うったえる）。市民の皆さんが自慢したいような写真や映像を表に出し、他の地域から来た人が「こんな素晴らしいものがあるのか」と思うようなコーナーがあれば良い。南砺市には良い写真が沢山ある。商工会や各お店でもそのような工夫をしているところがある。

委員長：（コロナ後の）新しい生活様式を考慮しながら、これまでの関わりや文化をどうやって持続させていくかというのは大変悩ましい。元に戻るのが良いのか、違う形になっていくのが良いのか。社会の流れがどういう風になっていくか。言葉だけではなく、実体としてどうしていくのか、というところをぜひ議論していきたい。市民の文化力、底力というのは、南砺市の一つの特徴だと思う。ハイカルチャーだけでなく、元々の力というか、厚み強い地域だと思う。

副委員長：コロナの関係で特にクローズアップされたが、城端むぎや祭りを実施するか否かという議論が何度も行われた。自分の町内の人たちだけで完結するのであれば練習も継続できるが、踊り手が足りず他の町から人を集めるとなると、コロナ禍では他所から来てもらうというのは難しい。コロナも一つの原因ではあるが、「他の町に頼んでまで人を集めて、祭りをいつまで存続できるのか」という議論が広がっているような気がする。コロナを契機に、抜本的に見直す流れが加速するのではないかと心配している。地域社会で子どもたちを巻き込んで、文化や土徳という習慣を子どもたちに教え続けていかなくではならない。例えば、左義長や地蔵祭り、獅子舞など、地域で続けていくべき伝統的行事。「人手がないからやめよう」ということはせず、みんなで応援して継続しようという雰囲気になり、去年井波では（獅子舞連絡協議会が）立ち上がったと聞いているが、その成果が他の地域にはまだ広まっていないと感じる。「子どもがいない」「限界だ」と、簡単に（獅子舞等を）やめてしまう集落が現実問題ある。そうではなくて、それを続けるために、左義長を隣の集落と合同で開催するとか、児童会を合同して夏休みの行事を統一するとか、色々なことを地域でやらなければいけないと思って頑張っている。獅子舞等とも深くかかわっている。その

辺もワーキンググループ等で議論や実態調査を行うなど、どうすれば文化がこれからも継続できるのか検討していただきたい。

委員長：とても重要な視点だと思う。前の計画策定時の時から、担い手不足というのは潜在的に抱えているだろうという問題であったが、今回のコロナ禍で顕在化した。それをどういう風に対処していくか、ここが瀬戸際というか、切実な課題に変わった。地域の中でこれまで継承してきた価値をどう再評価してつなげていくか。時代の流れとともにこれもなかなか難しいテーマである。一度途絶えてしまったものをまた元に戻す（よみがえらせる）というのは大変なことである。そのあたりを今回の改定にあたり、考えていかななくてはならないと思う。

委員：今年の獅子舞は、ほとんどの地区で全滅のような感じ。今年1年やらないという流れ。自分が恐れているのは、今年一旦中止にしたことがきっかけとなって、「獅子舞はなくても良いのではないか？」となってしまうこと。これまで自分たちが推進してきたことが止まってしまうのではと恐れている。そこをフォローアップするような取り組みが、これをきっかけにできれば良いと思う。特に自分は、ワーキングの第2部会担当だが、“ネットワーク”、“交流”、“新しい結”というような、現在は「やってはいけないこと」という部分に関わるころなので、形を変えて、角度を変えた見方で何か打開できないかと思っている。

委員長：コロナ後の社会は、都市と農村のこれまでの価値がいよいよ変わるだろう。リモートワークの導入など、都会で暮らすことが本当に豊かさを実現できるのかということ、都会に住んでいる人自らが問い直している状況。そういう意味では、色々な担い手を都市部から集めるための文化的な厚みや魅力が南砺市にはあるので、そういったところにも広げていけないか。長期的には難しいかもしれないが。

市長：棟方志功のお孫さんである石井頼子さんがもう一度福光に来て、3年程かけて棟方志功の（遺品の中から手紙などの）情報やデータを整理するという動きがある。「ウィズコロナ」「アフターコロナ」の流れが始まるきっかけになるような気がする。ここに文言を入れるかどうかは別として、これからの時代、こういうことが起きうること。次の時代が始まるきっかけとして良い話題になると思うので応援したい。

委員長：棟方志功しかり、南砺市にはワクワクするような素材が他にも色々あるような気がする。現在追加を検討している項目はその通りなのだが、もう少し（何かあるのではないか）ワーキンググループでも検討いただければ。明るい未来を見ていけるといいと思う。

委員：新しい計画を策定するわけなので、まず第1次計画のフィードバックを行い、実施状況や課題、反省点をきちんと検証する必要がある。同じ事業を続けてやる場合はワーキンググループでも良いが、新たに南砺市全体の文化芸術を見て、もっと広範囲にこういうものを新たに盛り込むべきだとか、課題の抽出と新たな展開をした方が良い。必ずしも世界遺産や日本遺産というくくりにとらわれず、地域おこしというくくりからいうと、地域の小さな文化芸術にも光を当てて、地域の

皆さんの活力の源を与えるということも必要。自分たちの地域だけで自己満足せず、関係市民の皆さんや国内外の友好交流相手の皆さんなど、外にもしっかり PR して、実際に南砺市に足を運んでいただけなくても、南砺市にはこういう素晴らしい文化があるということをしっかり広めることも大事。

委員長：三つの大事な視点をいただいた。一つは、計画を改定するにあたり検証が必要ということ。実施計画はワーキンググループで検証することとなっているので、適宜検証をお願いしたい。もう一つ大事な視点なのが、制度に守られた世界遺産や日本遺産などは守られている一方で、地域の身近な文化がどんどん弱っていくということがよくある。そこが弱ってしまうと、地域振興自体も弱ってしまう。そういった視点を欠かさずをお願いしたい。最後に、関係市民という話があったが、外に住んでいるけどその地域（南砺市）が好きだという方もいるので文化芸術にも活用できるのではないかな。

委員：自分も先の基本計画、実施計画の策定を担当していたが、南砺市の幅広い伝統文化や歴史、新しい創造的な文化は素晴らしいものが沢山ある。後継者をどう育成するか、未来に向かってどうつないでいくか、ということが非常に大事。地域が元気を出していけるように、この計画を基に地域振興につなげられないか。そして、文化芸術での移住定住も兼ねて、南砺市をもっと元気にしたいということで、これまでワーキンググループの皆さんとも話し合ってきた。コロナ禍で大変な時代になってきているが、そういうことも計画にしっかり盛り込んで、5 年先を見据えた内容となるように、アンケート調査（文化芸術に関する調査）の結果も踏まえて、皆さんと相談しながら進めていければ良いと思う。

委員：南砺市に関わる機会というのはこれまであまりなかったが、近年は高岡市、呉西地区を中心に伝統工芸の調査をしている。今回南砺市に関わることになったということで、これから勉強しながら応援したいと思っている。南砺市には独自の文化資源が豊富にある。コロナ時代の新しい生活様式というものが、南砺型の新しい生活様式として発信できるのではないかと感じている。都市と農村の姿の変化という話をされたが、南砺独自の「ウィズコロナ」の形をこの計画の中に盛り込んでいく、あるいは計画というものでなくても発信するものが出来れば、南砺の将来・未来を見据えた新しい形がくるのではと感じている。できるだけワーキンググループ活動の方にも参加しながら学んでいきたいと考えている。ワーキンググループは各部会に分けられているが、できればその垣根を超えた形で、リーダー同士で意見交換をしながら相互に深めていき、実施計画の策定につなげてほしいと感じた。

委員長：南砺型の生活様式というか、身体は離れているけれど、精神的には結びついているというような形の提示と実践が出来れば良いと思う。

副委員長：ウィズコロナということで気が付いたことだが、県外に行くのはやめようということで、県外ではなく地元の温泉や飲食店などに行こうという動きが出てきた。小中学校なども、子どもたちは修学旅行に行ける状況ではない。逆にこの

ような状況を利用して、南砺市内の文化芸術の素晴らしさを全国に発信するというのではなく、地元の素晴らしいところを子どもたちに積極的に見せ、地元の良さを再認識する、そういう良い機会に転嫁させれば良いのでは。学校でもふるさと教育を頑張っているが、城端の子は城端のことだけやればよいという雰囲気がある。そうではなくて、南砺市全体の（ことを学ぶ必要があつて）、隣の地域の見たことない文化財を見学してまわるとか、そういう良い機会になるのではないかと思う。そういうことも視野に入れて学校現場も頑張ってもらいたい。

「地元のことを知ろう」と言う時の“地元”とは何か。城端の人は城端のことだけ知っていればよいのかということそうではない。福光や福野、城端以外の素晴らしいところも見に行く。子どもだけでなく大人も同じこと。こういうことをやってみるのが大事。

委員長：身近な価値の再評価。怪我の功名ではないが、そういう動きはとても大事になってくると思う。（子どものころに関わった経験は重要で）大人になったときに「助け合おう」と言っても、関わったことのないところに入っていきこうという気はなかなか起きない。それが関わり方の必要性、色々な世代で身体は離れているが心でつながろうという動き。少し離れた地域に行けばこのような良いものがあるのだとお互いに知る機会とポジティブにとらえる。わざわざ遠くに行かなくても近くに良いものがあるのだと、身近な価値、地域の良さを知るきっかけにする。そういう視点も含めて考えていきたい。今日の会議でいただいた意見も含めて、ワーキンググループにて実施計画について議論していただき、計画の策定につなげていきたい。

事務局：キーワードとしては、第1次計画の時からやってきたことであるが、地域の活力をどうつけていくか、そしてそれを続けていくためには何が必要なのかということ。そして今日新たに出てきたことが「ウィズコロナ」、「アフターコロナ」。その中で、南砺型として発信できれば良いというご意見もあったので、今日の会議内容をワーキンググループにもしっかりとお伝えしたい。

市長：短時間の会議ではあったが、沢山のキーワードが出てきた。一番心配していたのが、「ウィズ／アフターコロナ」ということ。元々お祭りや地域での活動は密になるためのようなもの。密にならないように何を変えていくべきか。今まで経験したことのないところで、心がつながるといのは当然だが、何か妙案がこの計画から出るような予感がする。この計画を作る機会に、ここに出てきた知恵が暮らしの中に広まっていけば良いと思う。皆様のご尽力を賜りますが、よろしくお願いたします。

7. 閉会